

Case Explorer

ケースエクスプローラー

ファイルNo.215

埼玉県蓮田市

薬局オリーブファーマシー



地域に安全と安心を与える“街のインフラ”へ

将来見据えた取組みで薬局の可能性探る

埼玉県蓮田市にある同薬局は駅からの距離も近く、また1990年に開設した比較的新しい店舗であるため外観も非常にキレイで存在感がある。店舗面積50坪ほどの店内もとても広々としており、待合室も大きな窓ガラスからたっぷりと外光が入る開放的で清潔感のある設計だ。

「目薬1本から抗がん剤の混注まで、患者さんの要望には全て応えます」と宮野氏が話すように、同薬局では幅広い医療機関からの処方せんを受け付けており、医療用医薬品の備蓄も3000品目以上と、患者のニーズに的確に対応できるようしっかりと準備を整えている。1日の平均客数は300人と多く、さらに赤ん坊から高齢者まで客層も幅広いため、スタッフには正確さやスピードなど高いスキルが求められる。そのため同薬局では、年に2回は外部から講師を呼んで研修を行ったり、書籍やインターネットの情報をスタッフに提供したりとスキル向上にも力を注ぎ、一人ひとりが明確な目標を持って取り組めるようサポートしている。

在宅医療にも積極的に取り組んでおり、「医師からの指示がなくても薬剤師が必要を感じれば患者さんの家を訪ねます」(宮野氏)と、患者の症状と体調を最優先するその姿勢は、まさに薬剤師という医療施設提供者としてあるべき姿であり、薬剤師の職能を高めることにもつながっていくはずだ。さらに宮野氏は「その流れでいくとOTC薬も大切」とセルフメディケーションの推進にも力を入れる。第1類のOTC薬はほ



ぼ全て常備しているほか、サプリメントや健康食品なども多く取り揃え、相談に来た患者の症状に合った対応をする。そしてそれらの取り組みが地域の信頼につながり、1日に応需する平均処方せん枚数は280枚と多く、その他にも食事の献立を持って栄養相談に来る人などもあり、調剤以外でも同薬局を利用する患者は増えてきている。

“安全”を目標に職能広げる

昨年5月に店舗改装を行った際に設置した、感染症患者専用のクリーンルームも同薬局の特長の一つだ。通常とは別の入口と待合室を設けることで他の患者との接触を極力避け



クリーンルームは感染症患者と他患者の接触を避ける設計で安全性を向上

「どうして本屋もレンタルビデオ屋もないのかな」、10代の頃は自分の住んでいる街にそんな不満を持っていた。20代になると「飲み屋がない」なんて生意気にもそんなことを思ったりもした。全てを兼ね備えた街などあるはずがなく、足りないものをあげればきりがない。しかしそれとは逆に“なくてはならないもの”は確実に存在する。そんな当たり前のことをこの度の取材で実感した。「街のインフラとして地域の人たちから、ちゃんとした薬局があってよかった、そう思われるよう薬局としての役目を果たしていきたい」。そう話すのは『薬局オリーブファーマシー』の代表取締役であり薬剤師の宮野訓夫氏。実際にセルフメディケーションの推進や在宅医療などにも積極的に取り組み、その思いはしっかりと行動で示されている。こういった高い志と行動力を持った薬局、薬剤師こそ街にとって最も重要であり必要不可欠な存在なのだ。



るほか、空気清浄を行い常に空気を清潔に保つことができる。改装前までは周りの患者への配慮が十分行き届いていなかったというが、同ルームを設置することで、インフルエンザや水痘などの感染症患者が来局した際でも、全ての患者がより安全に、安心して利用できるよう工夫がなされた。

そういう改装も今後を見据えてのことだと宮野氏は話す。「医師の職域を侵さないようにしながら」と前置きした上で「例えば検査キットのあるインフルエンザの検査などは、将来的には薬局ができるようすべき」と、薬局における軽医療の可能性を常に思考しており、いつそうなっても迅速な対応できるように取り組んでいる。医療費削減や医師不足などの問題が取り立たされる現在だからこそ、薬剤師が職能を広げ、薬局が街の基礎的な施設として患者からその存在を認知されるいい機会と言えるのではないだろうか。

「薬局の究極のアメニティは“安全”」と言う宮野氏の言葉は非常にシンプルだ。しかしそれゆえに重みがあり深い。薬局、そして薬剤師の将来に目を向けて日々動いているからこそ、説得力を持つ言葉だと感じた。

(緒方)